

# 丁寧度判定で測定したポライトネス・ ストラテジーの要因に関する決定木分析\*

林炫情\*\*・玉岡賀津雄\*\*\*・宮岡弥生\*\*\*\*・金秀眞\*\*\*\*\*  
(e-mail : hylim@yamaguchi-pu.ac.jp)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 研究方法
    - 2.1 調査時期と被調査者属性
    - 2.2 調査内容
    - 2.3 決定木分析
  3. 分析結果と考察
    - 3.1 雑談の場面での言語使用の丁寧度に関する主観的判断の決定木分析結果
    - 3.2 依頼の場面での言語使用の丁寧度に関する主観的判断の決定木分析結果
  4. まとめ
- 

## 1. はじめに

ポライトネスを対人関係における基本的な構え（相手と自分の距離の遠近、相手に対する配慮）とすると、そのポライトネスが表現・伝達される具体的な手段が「ポライトネス・ストラテジー(politeness strategy)<sup>1)</sup>である(Brown & Levinson, 1978, 1987)。

\* 本研究は、日本学術研究費助成金・若手研究B「日本語と韓国語の呼称選択に見られるポライトネス・ストラテジーに関する研究」（課題番号18720111；研究代表者、林炫情）の助成を受けて行った。また、本稿作成においては日本学術研究費助成金・基盤研究C「日韓両言語の呼称語と述語表現の共起関係に関する容認性判断と性格特性」（課題番号21520447；研究代表者、林炫情）の助成も一部受けた。

\* \* 山口県立大学 准教授 対照言語学

\* \* \* 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 教授 言語心理学

\* \* \* \* 広島経済大学 准教授 日本語教育

\* \* \* \* \* 慶南大学 講義専担講師 対照言語学

www.kci.go.kr

Brown & Levinsonは、不可避的に相手や自分のフェイスを侵害してしまう言語行為を faceと呼び、face(社会における公的自己像)と合理性(rationality)を持った人間同士のふるまいかたをシミュレートした。そして、face侵害の軽減のためのポライト戦略の選択を決定づけるものとして、つぎの公式を提案した。

$$W(x) = D(S, H) + P(H, S) + R(x)$$

W(x): FTA(x): フェイス侵害行為(Face Threatening Act)の重さ

D: 話し手と聞き手との社会的距離

P: 聞き手が話し手に及ぼす力

R(x): FTA(x)が、その文化において持つとみなされる負荷の度合い

S: 話し手

H: 聞き手

Brown & Levinson (1987, p.76より)

つまり、彼らは、ある行為xのフェイス・リスクW(x)は、①ヨコの人間関係における話し手と聞き手との「社会的距離(D; distance)」、②タテの人間関係における聞き手が話し手に及ぼす「力(P; power)」、そして③xという行為がその文化内でどの程度の負荷になるとみなされているかという「その行為自体がもつ負担の度合い(R; rank of imposition)」の3つの要因で、「フェイス侵害行為(FTA; face threatening act)」の「重さ(W; weightiness)」が決まり、それに応じて戦略が選択されるとしている。

フェイス・リスクを構成する要因が、人間関係にかかわるものと事柄自体にかかわるものとに分かれるというBrown & Levinsonの理論は、同じ行為であっても、相手が見知らぬ人であったり(D値大)、相手がいわゆる目上の人物であったり(P値大)すれば、トータルのフェイス・リスクは相対的に大きくなる。あるいはまた、同じ行為であっても文化が異なればその重み(R値)は異なる、といった常識的事実にも自然な解釈を与えることができる(滝浦, 2008)普遍的な枠組みといえよう。

ところで、ポライトネスの要因については性別、性格、文化の差などの影響も多数報告されている。まず、性差の影響については、女性は男性よりポライトであるというLakoff(1975)の指摘の後、数多くの実証研究が試みられている(e.g., Canary, Cunningham & Cody, 1988; Holmes, 1995; Suzuki, 2007; 内田, 1997; Ide, 1982; 宇佐

1) 戦略を訳せば方略ということになり、意図的な戦術のイメージが勝ってくるが、ブラウン&レヴィンソンの戦略は、慣習的・無意識的な言葉の使い分けなどもカバーする広い概念である(滝浦, 2008)。

美, 1994; Tamaoka, Lim, Miyaoka, & Kiyama, 2010)。性格の違いによる影響は、社会心理学の領域の観点からの報告がみられ、性格とコミュニケーション・スタイルとの関連が示唆されている (e.g., Infante & Wigley III, 1986; Ramsey, 1966; Rogan & France, 2003; Tamaoka, Lim, Miyaoka, & Kiyama, 2010)。

文化差の影響については、比較文化論の観点から東洋と西洋の対立によるパターン化が試みられている。例えば、個人主義(individualism)と集団主義(collectivism)(Hofstede, 1980)の対立や、低コンテクスト文化(low-context culture)と高コンテクスト文化(high-context culture)の対立などである。

また、宇佐美(2000)は一連の研究のなかで、Brown & Levinsonのポライトネス理論の第3の要因として挙げられている「負担の度合い」には、文化差が大きく係わっているとしている。そしてHoltgraves & Yang (1990)は、アメリカ人と韓国人を対象に依頼ストラテジーに関する3つの実験を実施し、Brown & Levinson (1987)の普遍理論の検証を行っている。その結果、アメリカ人と韓国人とではストラテジーの認識に違いはあるものの、両者とも「力」と「距離」の2つの要因に応じて相手に配慮したストラテジーを選択し、目的を円滑に達成させている様相は類似していることが明らかとなった。これは、Brown & Levinson (1987)の普遍理論を支持するものである。

さらに、ポライトネス普遍理論に関して『月刊言語』に掲載された宇佐美の一連の研究(2002)では、従来の社会言語学的なアプローチでの敬語研究<sup>2)</sup>が、「上下」、「親疎」、「場面」などの要因を、固定的、分離的に捉えて、その影響を択一的に同定しようとするような現象のとらえ方なのに対し、ポライトネス理論は、言語行動をより動的、連続的に捉える普遍的理論であるとしている。しかしながら、Brown & Levinson (1987)の理論は枠組みとしては普遍理論ではあるが、滝浦(2008)が指摘しているように、言語使用のなかでどのストラテジーが優勢であるかは言語および文化によって異なるものである。

そこで、本研究では、Brown & Levinsonのポライトネス理論の公式で示されている「社会的距離(親疎関係)」、「力関係(社会的地位)」、「負担の度合い(雑談と依頼の2つの場面)」に、「文化差(日韓の比較)」と「話し手と聞き手との性差(同性か異性か)」を加えて、合計5つの要因を設定し、言葉遣いの丁寧度(以下、丁寧度)に与えるこれら諸要因の影響を多元的かつ階層的に考察することを目的とする。なお、Brown & Levinsonのポライトネス理論をもとにした本研究の言葉遣いの丁寧度とは、相手に対してどのくらい丁寧な言葉遣いをするのかという言語使用者の意識、つまり主観的判断による丁寧度を示す。したがって、敬語研究における言語表現の丁寧度とは必ずしも一致しない。

2) 従来の社会言語学における敬語研究では、例えば、年下の上司に話す場合に「年齢と社会的地位の上下のどちらが優先されて言語行動が決められるのか」というように、「上下」「親疎」「場面」などといった、言語行動の要因を総合的かつ連動的に捉えるというよりは、固定的で分離的に捉え、その影響を検討または検証した研究が多く見られる。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査時期と被調査者属性

2006年10月に、韓国慶南地域の韓国人大学生144名(女性93名、男性51名)および日本の広島在住の日本人大学生143名(女性56名、男性87名)の合計287名を対象に、丁寧度に関する質問紙調査を行った。日本人被調査者の年齢の平均は19才8ヶ月(標準偏差は1才10ヶ月)、韓国人被調査者の年齢の平均は20才6ヶ月(標準偏差は1才9ヶ月)であった。

### 2.2 調査内容

本調査では、負担の度合いによって言葉遣いの丁寧度は変わるのかどうかを検討するため、負担の度合いが異なる場面として、普段あまり気を遣わない「雑談」とある程度気を遣わなくてはならない「依頼」の2つの場面を設定した。質問文では第三者による影響を排除するため、自分と相手が1対1で会話をする場面であることを明示した。

次に、それぞれの場面について、言葉遣いの丁寧度を決める要因として、①「社会的距離」は「親(親しい)・疎(あまり親しくない)・外(初対面)」の3つ、②「力関係」は「目上1(大学の先生)・目上2(年上の先輩)・同等(同じ年の同級生)・目下(年下の後輩)」の4つ、③「話し手と聞き手との性差」は「同性・異性」の2つを設定した。①から③までの条件について、2つの「雑談」と「依頼」のそれぞれの場面でどのくらい気を遣うかを、「全く気を遣わない」の1から「非常に気を遣う」の5までの5段階尺度(丁寧度)で、被調査者に回答を求めた。さらに同じ調査を日本人と韓国人に行って、④「文化差」の要因として、「日本・韓国」の2つを加えた。すなわち、図1に示したとおり、「社会的距離」「力関係」「負担の度合い」「文化差」「話し手と聞き手との性差」の5つの要因(説明変数)が、言葉遣いの丁寧度(目的変数)にどのように影響するかについての主観的判断を求めた。質問文の詳細は末尾に示す。なお、紙面の都合上日本語のみを示すことにする。

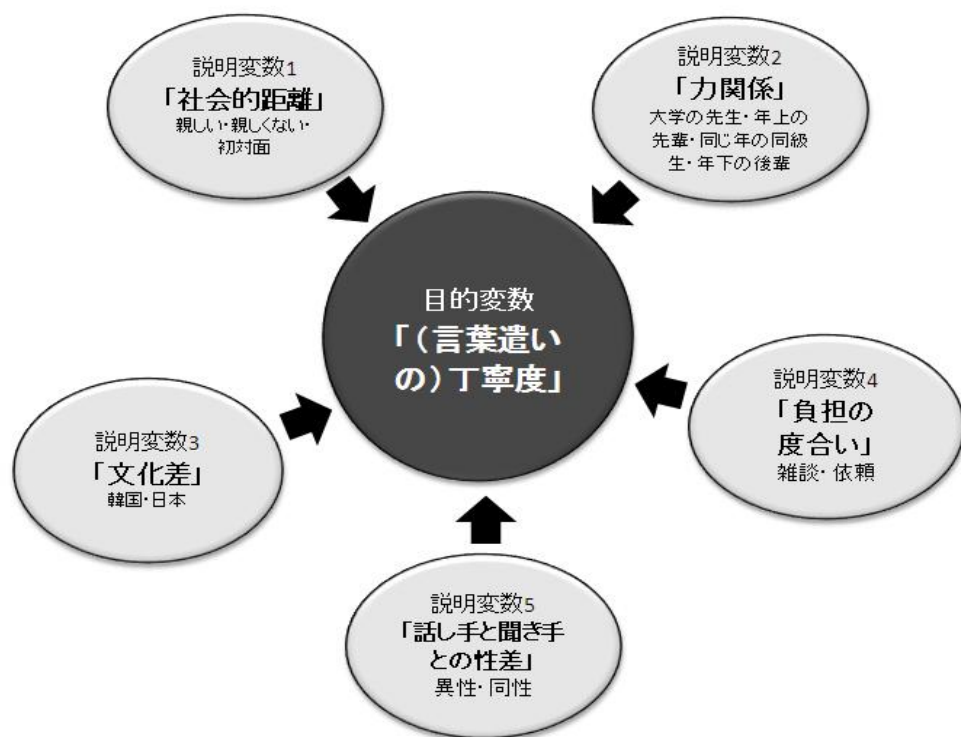


図1 丁寧度(目的変数)とポライトネス・ストラテジーの要因(説明変数)

## 2.3 決定木分析

負担の度合いが異なる「雑談」と「依頼」の2つの場面のそれぞれについて、言葉遣いの丁寧度(従属変数あるいは予測変数)を、社会的距離、力関係、性差、文化差の4つの説明変数(あるいは独立変数)で予測する「決定木(decision tree)」分析を行った。分析には、SPSS(2006)のClassification Trees(Ver.15)で、CHAID (Chi-squared Automatic Interaction Detector)の手法を使った。

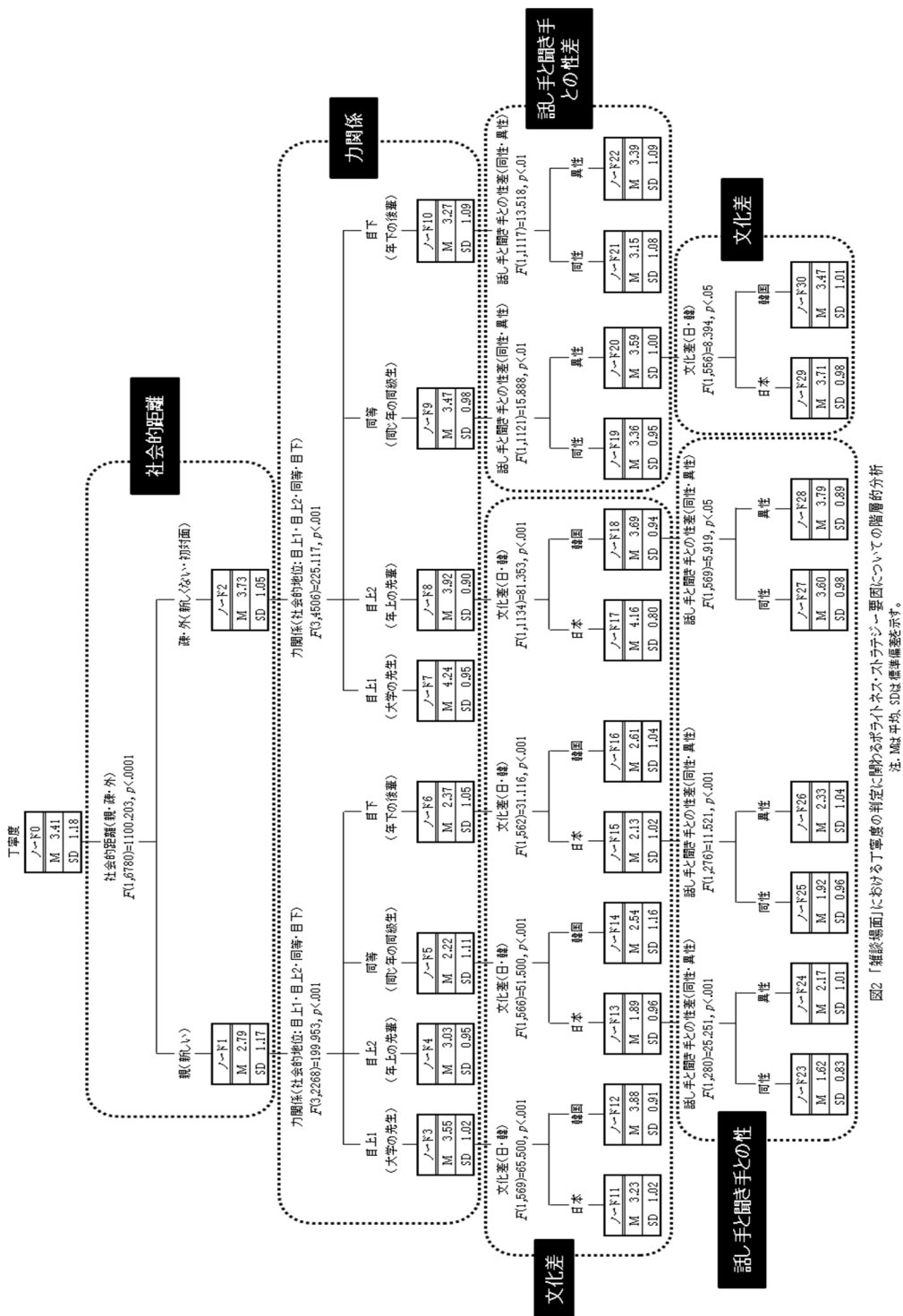
決定木分析は、複数の要因群から予測に有益な要因を選択する手法であり、分析結果は階層をなす樹形図で表される。決定木では各要因がもつ複数の条件のうち、傾向が同じものをグループ化している。樹形図の上部にある要因ほど強い影響力を持ち、上部の要因と交互作用がある場合には、下方に枝を分岐させていく。なお、コーパス研究における決定木分析の手法の詳細については玉岡(2006)を参照。また、決定木分析を使用した社会言語学の研究には、林・玉岡(2010)、林・玉岡・宮岡(2005, 2008)、Tamaoka, Lim, Miyaoka, & Kiyama(2010)などがある。

### 3. 分析結果と考察

分析では、まず「負担の度合い」の異なる「雑談」と「依頼」の2つの場面における丁寧度の違いについて検討した。言葉遣い全体の丁寧度は、「雑談」の場面の反応数は6,781で、平均が3.41(標準偏差は1.18)、「依頼」の場面の反応数は6,825で平均が3.65(標準偏差が1.17)であった。反応数が異なるのは、無回答による欠損値のためである。「雑談」と「依頼」の場面の平均に有意な差があるかどうかを検討するため、独立したサンプルのt検定を行った結果、両者の間には有意な違いがみられた[ $t(1, 3605)=11.914$ ,  $p<.001$ ]。丁寧度は、「雑談」の場面よりも、「負担の度合い」の大きい「依頼」の場面のほうが高いことが認められた。次に、「雑談」と「依頼」の2つの場面を別々にして、ポライトネスを決める「社会的距離」「力関係」「文化差」「性差」の4つの要因(説明変数)から丁寧度(目的変数)を予測する決定木分析を行った。以下、「雑談」の場面と「依頼」の場面に分け、それぞれの分析結果を報告する。

#### 3.1 雑談の場面での言語使用の丁寧度に関する主観的判断の決定木分析の結果

「雑談」場面の決定木分析の結果は、図2の樹形図に示した通りである。丁寧度を決めるもっとも影響の強い要因は親疎関係の「社会的距離」であった[ $F(1, 6780)=1100.203$ ,  $p<.0001$ ]。図2からも分かるように、丁寧度のノード0からノード1の「親」とノード2の「疎・外」に枝が分かれている。これは丁寧度が「親」と「疎・外」で大きく異なっていることを示している。社会的距離の異なる「疎」と「外」が同じグループに分類されているのは、親しくない関係と初対面とでは丁寧度に有意差がなく、同じ傾向を示したためである。つまり、親しい関係では丁寧度が低く( $M=2.76$ )、親しくない・初対面の場合は丁寧度が高くなる( $M=3.73$ )ということが示された。また、「社会的距離」と目上・目下といった「力関係」には交互作用がみられた[親しい場合が、 $F(1, 2268)=199.953$ ,  $p<.001$ ; 親しくない・初対面の場合が、 $F(1, 4506)=225.117$ ,  $p<.001$ ]。親しい関係では「大学の先生(平均=3.55)」「大学の先輩(平均=3.03)」「同じ年の同級生(平均=2.22)」「年下の後輩(平均=2.37)」にそれぞれ有意な違いが見られ、大学の先生についての丁寧度が最も高く、同じ年の同級生に対しての丁寧度が最も低かった。年下の後輩に対して同じ年の同級生よりも気を遣っているのは、非常に興味深い結果である。親しい関係では、同じ年の同級生に対する距離がより近いことがうかがえる。これに対し、ノード2の親しくない・初対面の関係では、「大学の先生(平均=4.24)」「大学の先輩(平均=3.92)」「同じ年の同級生(平均=3.47)」「年下の後輩(平均



=3.27)」の4つに分かれ、この順番で丁寧度の度合いが低いことが分かった。

「文化差」と「話し手と聞き手との性差」の要因の傾向は一貫していなかった。まず、「社会的距離」、「力関係」に次いで、3番目の要因として日韓の「文化差」がみられたのは、親しい関係の大学の先生(日本人の $M=3.23$ 、韓国人の $M=3.88$ )、同じ年の同級生(日本人の $M=1.89$ 、韓国人の $M=2.54$ )、年下の後輩(日本人の $M=2.13$ 、韓国人の $M=2.61$ )と疎・外の関係の年上の先輩(日本人の $M=4.16$ 、韓国人の $M=3.69$ )であった。言葉遣いの丁寧度をみると、韓国人は日本人に比べると、親しい間柄に対してもより丁寧な言葉遣いをしている。しかし、疎・外の年上の先輩に対する言葉遣いをみると、日本人のほうがより丁寧な言葉遣いをしていることが明らかになった。つまり、日本人は韓国人に比べて、D(話し手と聞き手との社会的距離)の要因がより影響していることがうかがえる。また、日韓差がみられた親しい同じ年の同級生(日本人)と親しい年下の後輩(日本人)、親しくない・初対面の年上の先輩(韓国人)に対しては、相手が異性か同性かによって違いがみられ、全て同性の相手よりは異性の相手に対してより丁寧な言葉遣いをしていた。

一方、「話し手と聞き手との性差の影響」は、親しい関係では統計的な有意差はみられず、疎・外・同じ年の同級生(同性の $M=3.36$ 、異性の $M=3.59$ )と疎・外・年下の後輩(同性の $M=3.15$ 、異性の $M=3.39$ )に対してのみであった。「話し手と聞き手との性差」に有意な違いがみられたのは、疎・外の同じ年の同級生と年下の後輩に対してであった。丁寧度は両場面とも同性よりは異性に対してが高く、異性に対してより丁寧な言葉遣いをしていることが分かる。疎・外・同じ年の同級生に対しては文化によっても違いがみられ、韓国人( $M=3.47$ )よりも日本人( $M=3.71$ )のほうが異性に対してより丁寧な言葉遣いをしていることが分かった。

## 3.2 依頼の場面での言語使用の丁寧度に関する主観的判断の決定木分析結果

「依頼」の場面の決定木分析の結果は、図3の樹形図に示した通りである。「雑談」の場面と同様に、丁寧度を決定するもっとも強い要因は「社会的距離」であった[ $F(1, 6824)=982.607$ ,  $p<.0001$ ]。丁寧度は雑談の場面同様、ノード0からノード1の「親」とノード2の「疎・外」に枝が分かれており、親しい関係( $M=3.06$ )よりも親しくない・初対面の間柄( $M=3.94$ )で丁寧度がかなり高くなっている。

社会的距離と最も強い交互作用が認められた要因は「力関係」で[ $F(1, 2269)=227.909$ ,  $p<.001$ ; 親しくない・初対面の場合が $F(1, 4551)=187.847$ ,  $p<.001$ ]、「親」と「疎・外」の両方とも、「大学の先生」「年上の先輩」「同じ年の友達・年下の後輩」の順に丁寧度がそれぞれ高くなっている。丁寧度が最も高かったのは「疎・



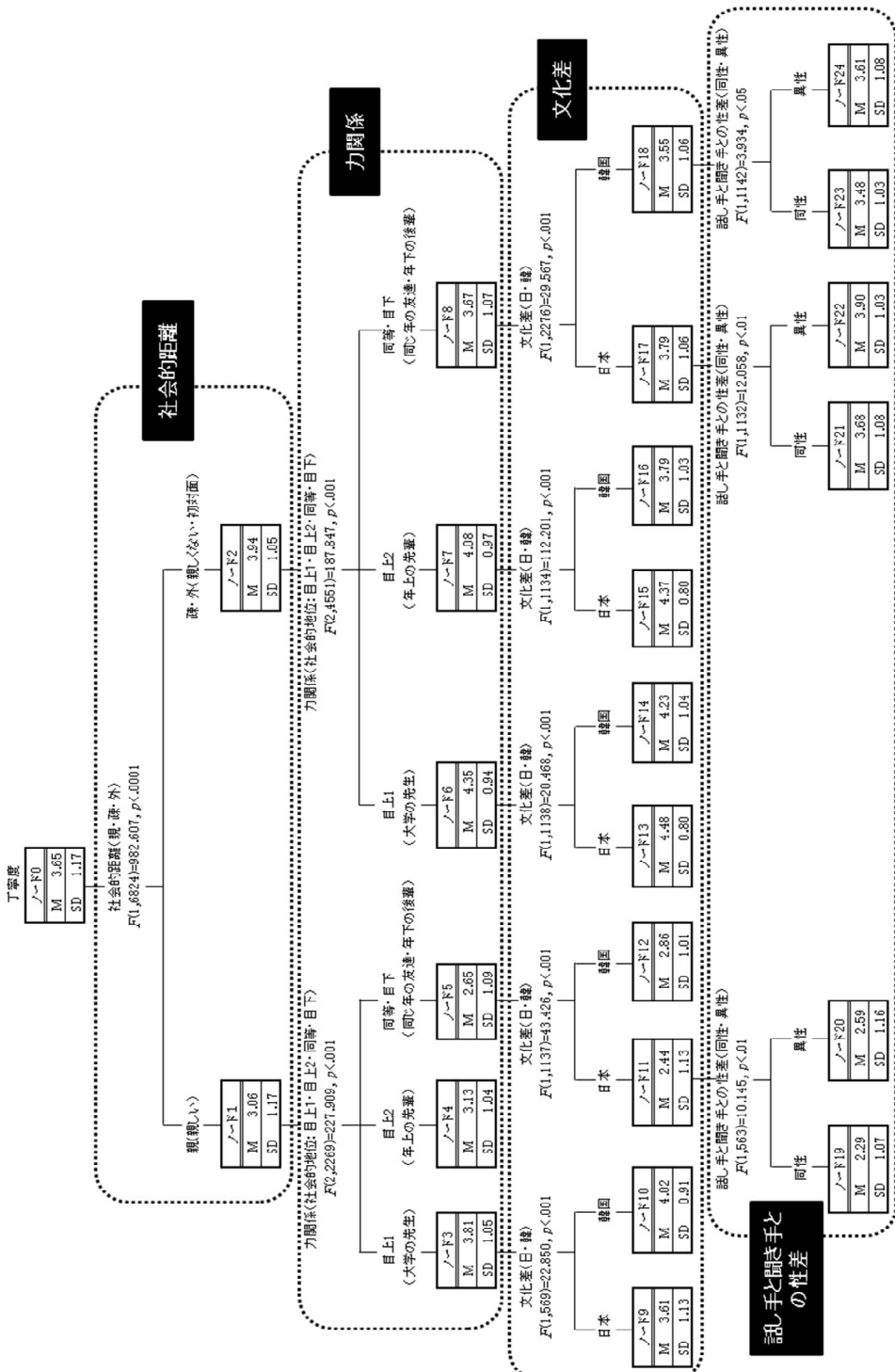


図3 「依頼場面」における丁寧度の判定に関わるポライトネス・ストラテジー要因についての階層的分析  
注: Mは平均, SDは標準偏差を示す。

外」の大学の先生 (M=4.35) であり、最も低かったのは親しい同じ年の友達・年下の後輩 (M=2.65) であった。

「力関係」の次は「文化差」が下位要因としてきており、親しい年上の先輩を除く全ての場面で違いがみられた。日韓差において最も興味深いのは、同じ目上の人に対する場合である。日本の場合は、親しい大学の先生に対する丁寧度(M=3.61)は、親・外の関係にある同じ年の友達・年下の後輩に対する丁寧度(M=3.79)よりも低い。これに対し、韓国の場合は親疎によって丁寧度に程度の違いがあるものの、目上である大学の先生と同じ年の友達・年下の後輩に対する言葉遣いの丁寧度にはかなりの差がみられるのである。つまり、日本人は親疎外といった距離関係、韓国人は上下の力関係をより重視し、言葉を使用していることがうかがえる。

「話し手と聞き手との性差」は、日本の「親しい同じ年の友達・年下の後輩」、「親しくない・初対面の同じ年の友達・年下の後輩」、そして韓国の「親しくない・初対面の同じ年の友達・年下の後輩」のみにみられた。丁寧度の差はあるものの日韓ともに同性よりは異性に対してより丁寧な言葉遣いをしている。

## 4. まとめ

本研究では決定木分析を使って、言葉遣いの丁寧度に影響する諸要因の働きについて、それぞれの要因の効果を多元的に検討するとともに、複数の要因群の関係性を階層的に把握しようと試みた。決定木分析の結果は、次の 5 つに要約することができる。

第 1 に、言葉遣い全体の丁寧度は、「雑談」の場面よりも「依頼」の場面のほうが高い。これは、ポライトネス理論からすると、相手のフェイスを脅かす度合い(FTA)が、「雑談」の場面より依頼の場面で高くなるからだと解釈できよう。つまり、言葉遣いの丁寧度は場面に影響されることが分かる。

第 2 に、「雑談」と「依頼」の場面ともに、「社会的距離(D)」が 4 つの要因のなかで最も上位にきており、「親」と「疎・外」とで丁寧度が有意に異なっていた。「疎」と「外」が同じグループに分類されていたが、これは、親しくない相手と初対面の相手に対しては、丁寧度に違いがなかったことを意味している。丁寧度は両場面とも、親しい関係より親しくない・初対面の関係に対してより高くなることが分かった。

第 3 に、社会的地位による「力関係(P)」が、「社会的距離(D)」について、2番目に優位な要因となった。しかし、丁寧度のパターンは、「雑談」と「依頼」の場面では若干異なっていた。「雑談」の場面では「親」と「疎・外」のそれぞれについて「大学の先生」「年上の先輩」「同じ年の同級生」「年下の後輩」の 4 つに分かれているのに

対し、「依頼」の場面では「親」と「疎・外」のそれぞれについて「大学の先生」「年上の先輩」「同じ年の同級生・年下の後輩」の3つに分かれた。つまり、「雑談」の場合は、親しくない・初対面の関係では後輩より同級生に対して、親しい関係では同級生より後輩に対してより丁寧に接しているのに対し、「依頼」の場面では、同等の関係と年下の相手に対しては同じ丁寧度で接していることがうかがえる。

第4に、「依頼」の場面では、「社会的距離(D)」と「力関係(P)」に続いて、日韓の「文化差」、「話し手と聞き手との性差」の順で下位要因として分類された。一方、「雑談」の場面では、「社会的距離(D)」と「力関係(P)」が上位にくることは同じであるが、「力関係(P)」の下位要因は日韓の「文化差」と「相手の性差」が混在しており、効果の方向は必ずしも一貫しない。しかし、両場面における丁寧度のポライトネス・ストラテジーの要因を全体的にみると、「社会的距離(D)」>「力関係(P)」>「文化差」>「話し手と聞き手との性差」の順でより強く影響しているようである。特に、「社会的距離(D)」>「力関係(P)」は、雑談場面か依頼場面かといった負担の度合いに関係なく強くかつ安定して影響していることが分かった。

第5に、日韓とも「距離(D)」と「力関係(P)」がポライトネス・ストラテジーに強く影響している点で、両文化のコミュニケーション・スタイルはかなり類似しているといえる。しかし、行為を持つface侵害度の日韓の違いを、言葉の丁寧度の観点からより詳しくみると、程度の差はみられるものの日本人は親しい先生に対してよりも親しくない・初対面の同じ年の友達・年下の後輩に対する丁寧度が高い。つまり韓国より日本人のほうが、「距離(D)」をより優先した言葉遣いをしていることが推察できる。

以上のように本研究では、ポライトネスには対人要因である「距離(D)」と「力(P)」の要因が強く影響するとするBrown & Levinson(1978, 1987)の普遍理論の有効性を支持する結果が得られただけでなく、さらにその普遍理論を階層的に検討することによって、まず社会的な「距離(D)」が最も強く影響し、「力(P)」が次に影響するという優先順位まで示すことができた。また、Brown & Levinsonの普遍理論に、日本と韓国の文化差の影響、聞き手が話し手から見て同性か異性かという性差の影響がどのように絡み合っポライトネス・ストラテジーに影響しているのかについても明らかにすることができた。しかし、face侵害度における負担の度合いは、文化間だけの問題ではなく、同じ文化内でも場面、地域、階級、そして集団や個人のコミュニケーション・スタイルによっても違いがあることが十分予想される。したがって、本調査で得られた結果をより一般化するには、こうした要因をも考慮したうえでの総合的議論が必要であろう。また、言語意識と言語使用の実態は異なることも多いことから、今後は調査対象を大学生から社会人に拡大して分析するとともに、本研究で明らかになった言語意識の丁寧度と実際の会話で用いられる言語表現の丁寧度がどのくらい一致するのか、もし異なるとすれば、それはどこに起因するのかについてさらに探求していきたい。

## 【参考文献】

- ・ 井出祥子(2006)『わきまへの語用論』大修館書店.
- ・ 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生(2005)「味覚形容詞「甘い」「辛い」「渋い」「塩辛い」「酸っぱい」の基本義と別義に関する新聞および小説のコーパス出現頻度の解析」『日本語研究』12, 131-142.
- ・ 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生(2008)「日本語と韓国語の第三者待遇表現：聞き手の違いが他称詞と述語待遇選択に及ぼす影響」『山口県立大学学術情報』1, 56-70.
- ・ 林炫情・玉岡賀津雄(2010)「韓国語の行為要求型表現とその否定表現の丁寧度に関する研究」『山口県立大学学術情報』3, 11-24.
- ・ 宇佐美まゆみ(1994)「性差か力(power)の差か：初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より」『ことば』15, 53-69.
- ・ 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開 1 「ポライトネス」という概念」『月刊言語』31(1), 100-105. 大修館書店.
- ・ 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開 - B&Lのポライトネス理論(1)」『月刊言語』31(3), 108-113. 大修館書店.
- ・ 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開 -B&Lのポライトネス理論(2)」『月刊言語』31(4), 96-101. 大修館書店.
- ・ 宇佐美まゆみ(2002). ポライトネス理論の展開 -B&Lのポライトネス理論(3)」『月刊言語』31(5), 100-105. 大修館書店.
- ・ 内田伸子(1997)「会話行動に見られる性差」井出祥子(編)『女性語の世界』74-93. 東京：明治書院.
- ・ 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社.
- ・ 玉岡賀津雄(2006)「「決定木」分析によるコーパス研究の可能性：副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13(2), 169-179.
- ・ Brown, P., & Levinson, S. C. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody(Ed.), Questions and politeness (pp.56-289). Cambridge University Press. ・ Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- ・ Canary, D. J., Cunningham, E. M., & Cody, M. J. (1988). Goal types, gender, and locus of control in managing interpersonal conflict. Communication Research, 15, 426-446.
- ・ Hofstede, G. (1980). Culture's consequences: International differences in

work-related values. Beverly Hills, CA: Sage.

- ・ Holmes, J. (1995). Women, men and Politeness. New York: Longman.
- ・ Holtgraves, T & Yang, J. (1990). Politeness as universal: Cross-cultural perceptions of request strategies and inferences based on their use. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 719-729.
- ・ Ide, S. (1982). Japanese sociolinguistics: Politeness and women's language. *Lingua*, 57, 357 - 385.
- ・ Infante, D.A., & Wigley III, C. J. (1986). Verbal aggressiveness: An interpersonal model and measure. *Communication Monographs*, 53, 61-69.
- ・ Lakoff, R. (1975). *Language and woman's place*. New York: Harper & Row.
- ・ Ramsey, R. (1966). Personality and speech. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 116-118.
- ・ Rogan, R. G., & La France, B.H. (2003). An examination of the relationship between verbal aggressiveness, conflict management strategies, and conflict interaction goals. *Communication Quarterly*, 51, 458-469.
- ・ Suzuki, T. (2007). *A pragmatic approach to the generation and gender gap in Japanese politeness strategies*. Tokyo: Hituzi Shobo.
- ・ Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (2010) Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans, *Journal of Asian Pacific Communication*, 20, 23-45.

## 質問文一覧

### 雑談場面

あなたは、以下の間柄の人と1対1で雑談をするとき、普段、相手に対してどのくらい気を遣いながら話をしていますか。それぞれの相手に対する言葉遣いについて、あてはまるもの【「(1)全く気を遣わない」「(2)あまり気を遣わない」「(3)どちらともいえない」「(4)ある程度気を遣う」「(5)非常に気を遣う」】に○をつけてください。もし、あなたの近くに以下の間柄の人がいない場合は、いと想定して答えてください。

### 依頼場面

あなたは、以下の間柄のひとと 1 対 1 で話をする場面で、相手に「今度、大学で開かれるコンサートのチケットを買ってくれる」ことをお願いする場合、相手に対してどのくらい気を遣いながら話をしますか。それぞれの相手に対する言葉遣いについて、あてはまるもの【「(1)全く気を遣わない」「(2)あまり気を遣わない」「(3)どちらともえない」「(4)ある程度気を遣う」「(5)非常に気を遣う」】に○をつけてください。もし、あなたの近くに以下の間柄の人がいない場合は、いると想定して答えてください。

※間柄（質問紙ではランダムで提示）

1. よく話をする同性の大学の先生
2. よく話をする異性の大学の先生
3. ほとんど話をしたことのない同性の大学の先生
4. ほとんど話をしたことのない異性の大学の先生
5. 初対面の同性の大学の先生
6. 初対面の異性の大学の先生
7. よく話をする年上の同性の先輩
8. よく話をする年上の異性の先輩
9. ほとんど話をしたことのない年上の同性の先輩
10. ほとんど話をしたことのない年上の異性の先輩
11. 初対面の年上の同性の先輩
12. 初対面の年上の異性の先輩
13. よく話をする同じ年の同性の同級生
14. よく話をする同じ年の異性の同級生
15. ほとんど話をしたことのない同じ年の同性の同級生
16. ほとんど話をしたことのない同じ年の異性の同級生
17. 初対面の同じ年の同性の同級生
18. 初対面の同じ年の異性の同級生
19. よく話をする年下の同性の後輩
20. よく話をする年下の異性の後輩
21. ほとんど話をしたことのない年下の同性の後輩
22. ほとんど話をしたことのない年下の異性の後輩
23. 初対面の年下の同性の後輩
24. 初対面の年下の異性の後輩

## 要 旨

本研究では、ある行為 $x$ のもつフェイス・リスクの大きさは、相手との距離(D)、力関係(P)、事柄の負荷度(R)の3つの要因が加算的に働いて決まってくるというBrown & Levinsonの普遍理論に、日本と韓国の文化差の影響、聞き手が話し手から見て同性か異性かという性差の影響がどのように絡み合ってポライトネス・ストラテジーに影響しているのかについて、多元的かつ階層的に把握しようと試みた。分析では、複数の要因群から予測に有益な要因を選択する手法である決定木分析を用いた。分析の結果、言葉遣いの丁寧度は、場面によって違いが見られ、雑談の場面よりも依頼の場面のほうが高いことが分かった。また、ポライトネス・ストラテジーを決める要因は、全体的に「社会的距離(D)」>「力関係(P)」>「文化差」>「話し手と聞き手との性差」の順でより強く影響していた。特に、「社会的距離(D)」>「力関係(P)」は、雑談場面か依頼場面かといった負担の度合いに関係なく、強くかつ安定した影響要因であることを明らかにした。

キーワード：ポライトネス・ストラテジー、社会的距離、力関係、負担の度合い、文化差、話し手と聞き手との性差

투 고 : 2010. 8. 31

1차 심사 : 2010. 9. 11

2차 심사 : 2010. 9. 25